

「私はいじられている」という経験の 再組織化過程

テレビドラマ『35歳の高校生』のフレーム分析

友田 順也

はじめに 一問題の所在

最近、「いじり¹」という言葉をよく耳にする。これは端的に言えば、複数の人間が共在するときに実践される、「笑い」の感情表出を含む相互行為形式であるといえる。その「笑い合う」活動は、社会のなかで他者とともに何気なく実践し傍観する私たちにとって、お笑いやテレビ番組の演出のそれと同じように、「愛情表現」であることは自明のことで、また疑われようのないことのように思われるかもしれない。「『いじり』は愛情表現である」とは、参加者が「心から笑い合える」状態についての記述²であり、そうした記述が理解可能なのは、私たちが「一緒に」盛り上がることのできる「いじり」の实在を前提とするからである。親密な関係を確認するための「愛情表現」であるという「(肯定的な)『いじり』の实在」は、私たちの日常的な感覚と無理なく合致する。たしかに、「いじり」に伴って私たちが感じることのできる、あの「楽しんでいる」「面白がっている」感覚を否定しすることはできないし、あくまで予定調和な相互行為形式であることを事前に確かめ合い、周囲の反応を想定したうえで、戦略的に実践する「いじり」もありうる。こうした感覚は、「(肯定的な)『いじり』の实在」を確からしいものにし、「いじり」を話題にする際の自明の前

¹ 「いじる (弄る)」の連用形が名詞化したもの。辞書的な定義(日本国語大辞典第二版編集委員会編 1972=2000)にしたがえば、「指先でなでたりつねったりすること」「弱いものを困らせたり、からかったり、苦しめたりすること」「無理に求める・強要すること」などが挙げられるが、本研究では人に対する作用として使われる「いじり」を議論するため、「髪いじり」「パソコンいじり」のように物に対する作用の意味用法を除外する。なお、本稿では「いじり」を、「いじる」「いじられる」「いじられている」など語幹が同じものを総称する語として位置付ける。

² 本稿において「記述」という用語は、用紙に何かを書き記すことや、書き記したもののそれ自体ではなく、実際に人々がさまざまな現象や事象を理解可能なものにするために行う諸実践を指している(Gubrium and Holstein 1990=1997)。たとえば、『いじり』は愛情表現である」とは、「いじり」に関して私たちが言及したり解釈したり説明したりする、ひとつの理解可能な「記述」であるといえる。H.サックスによれば、「私たちが主題として取り上げるものは、それがなにであれ記述されなければならない。なにであれ、それ自体が既に記述されているのでなければ、私たちの記述装置の一部になることはできない」(Sacks 1963: 85)と述べ、社会学研究における課題について、「人々が理解可能なやり方で実践し合う、さまざまな活動の如何を提供する装置を再構成することである」(Sacks 1972: 256)と述べている。本研究はこうした発想に示唆を得ている。

提となっている。

だが、こうした前提認識は、「いじり」のある側面を見落としてしまっている。そもそも、人が『「いじり」』という状況』を具体的な場面を超えて設定することなどできるだろうか。例えば、他者が居る前では、統御できない「いじり」という社会的現実には「笑顔で」耐え、「私はいじられている」と「明るく」思い込まなければならない人間がいる。それでも周囲の人々は、いつもの「いじる」やりとりを何気ない行為のひとつとして行ったり傍観したりしている。さらに、参加者は日々多様な内容に富んだ会話や行為を織りなし、相互に関係性を再構成し続けている。その過程のある時点において、「私はいじられている」として経験を了解していた人間が、なんらかのかたちでもって「いじめられていた」として経験の書き換えを行ったとする。そうした人々の一連の相互行為は、あらかじめ定義づけられた概念によって本質を把握できる実態ではない。そうではなく、当該行為者が個別具体的な実践を通してアドホックに構築する過程であるといえる。「いじり」とされるものが、どのような経験として記述されるのか。このことは、当該行為者がそれぞれの状況のもとで相互行為的に「いじり」を適切に理解し記述するなかで定められなければならない、実践的な問いなのである。そのように考えると、「いじり」という相互行為形式の曖昧さが認識されるとともに、状況に参加する成員はいかにして自分たちの相互行為を「いじり」という経験として記述するのかという疑問が生じる。

こうした問題関心のもと、本稿では、エスノメソドロロジー³の立場から「いじり」という事象を問い直すことをねらいとしている。そうすることにより、実際にどのような状況のもとで人々が「いじり」という経験として引き受け、ひいては離脱しようのかを、その機序とともに明らかにする。さらには、こうした試みを通して、「いじり」という事象を読み解くための有効なひとつの方法獲得を目指したい。

1. 先行研究

本稿がこれからみていく「いじり」を分析していくうえで、実質的な先行研究として位置付けられるのは、團（2013）の「からかい」についての研究である。この研究は、学校教育現場において「笑いを含む活動」が、指導すべきかどうかの判断が難しい領域に置かれている点に着目し、実際に指導と結びつきうる「からかい」の事例をとりあげるかたちで、エスノメソドロロジーの方法論で考察したものである。彼の研究は、行為の連鎖の構造をリアルに描き出しつつ、「からかい」の形式的特徴に迫ったものであり、「からかい」が指導に結びつきうる構造のひとつとして、共通の成員性の達成だけでなく、「笑う者／笑われる者」という非対称な関係の存在を実証した点に大きな意義を見出すことができる。しかし、あくまで「笑いを含む活動」を基盤として相互行為をみるため、「からかい」と副題である「いじり」との区別が曖昧である。團も論文の最後で述べているように、「いじり」相互行為の具体的なデータを対象とした研究が積み重ねられ検討される必要がある。

³ エスノメソドロロジーとは、「社会の成員 (ethno-) が日常の相互行為を滞りなく進行させていくために使用している方法 (-method) を解明する学 (-logy) のこと」(岩内ら編 2006: 13) である。ガーフィンケル (Garfinkel, H.) によって創始され、社会的事実を自明視せず、成員の相互行為の結果達成されるものとみなし、ある社会や集団に属している考え方や方法を探究する社会学の1つの視点である。

一方で、『いじり』をどうみるかをめぐっては、ジャーナルや若者論の批評においていくつか議論がある（土井 2009；本間 2009；森 2009 など）。それらを大まかに捉えると、対面的相互行為における地位のラベリングないし対人関係に固有のルールが、行為者に「適切な」状況への参与を促すものとして、新たなかたちを変えた「いじめ」につながる懸念とする見方が多い⁴。たとえば森（2009）は、「いじる／いじられる」という非対称的なコミュニケーションが成立する背景として、『『キャラ』的關係』（森 2009: 307）と「対等性の原則」（森 2009: 308）の存在を挙げる。つまり一方では、「キャラ」をある人に割り当てることによって、人を傷つけるというタブーを犯す禁断の快楽を可能にし、もう一方では、「対等性の原則」のベースにある「楽しさ」によって、「キャラ」を担う人が傷ついているという事実を隠蔽するという仕組みである。それゆえ、「いじる」という行為は、「いじられキャラ」の悲しみを笑いと楽しさにすり替えるという意味で、「悪意のあるコミュニケーション」（森 2009: 308）であると指摘している。こうした立場は、「いじめ」問題との連続性に着目し、それによって『いじり』の肯定論』に対し警鐘を鳴らす役割を果たしてきた。すなわち、木堂（2006）が文学作品のなかで否定的な題材として扱って以来、社会学や教育学の領域でも「いじり」を注視する対象として明確に位置付けることによって、『いじり』の暴力性を浮かび上がらせることに成功している。自らの意思に反して「いじられる側」となってしまった人々の支援を検討するうえで、森のような「いじり」論は意義深い。しかし、こうした「いじり」論には、以下の二点に疑問が残る。

第一に、相互行為の具体性を分析の射程外にしたままでよいのか。これまでの「いじり」論では、「いじり」を肯定的にみるにせよ、否定的にみるにせよ、「はじめに」で述べたようなアドホックで動的な「いじり」までも、「キャラ」のような社会関係に影響を与えうる説明変数に回収してしまうことになる。そこで見過ごされてしまうのは、社会的相互行為が、ときに矛盾を含み複雑にせめぎあいつつ進行するという現実である。脆く移ろいやすい人と人との関係を考察するにあたって、「いじり」の参加者が実際にどのように状況に参加するのかを解明することは必要な作業であろう。つまり、従来の「いじり」論は、活動の担い手が、どのように状況に関与しつつ相互行為を達成するかについての道筋を示していない。それゆえ、「いじり」そのもののリアリティを欠いており、研究の視点としては実践者間の力関係にナイーブである。行為者の視点に近づきつつ、相互行為の具体的なありようを描くためには、状況に居合わせる参加者が、どのように活動を相互行為的に組織化するのが問われなければならない。こうした課題に応えていくためには、人々が共在する場で展開する複雑なせめぎあいの過程に着目する角度から、「いじり」にかかわる事象について分析することが有効となる。

第二に、「いじめ」との連続性を強調する立場から「いじり」をみてしまつては、「いじり」という事象そのものを積極的に扱えないのではないか。たとえ「愛情表現としての『いじり』』に対置させる批判的な論考を展開したとしても、「いじめ」との兼ね合いでみるかぎり、さまざまな「いじり」という事象から織りなされる「いじめの全体像」の把握を志

⁴ 本間は、人物の背景や歴史を勝手に書き換えてしまう『『キャラ』の虚構性』（本間 2009: 99）に注目し、「いじられキャラ」の意思に反したまま立ち位置が固定されることに警鐘を鳴らす。そのうえで、「キャラ」以外の多様で開かれた可能性に気付かせる工夫を教育に取り入れる重要性を指摘している（本間 2009）。

向することになる。しかしながら、「いじめ」もその内実をきわめて多様で幅広く、そのためにカテゴリー同士が交差する対象として、まとめて把握することは困難である。例えば、日本の学校教育において「いじめ」は、基本的には文部科学省による「子ども間の加害-被害行為」を指すものと参照されるべきであろうが、各々の教育現場あるいは教育従事者にとって「いじめ」に相当する用語は、それ自体がある内実を示しており、文部科学省の「いじめ」定義にぴたりと当てはまるわけではない。「からかい」や「無視」などの類義の用語も数多く存在し、それぞれの指し示す内容もまたそれぞれの現場によって異なっている。相互行為の実証的な研究においては、概念同士の関連や差異を比較考察することを目的とするのではなく、むしろ相互行為の多義性・多様性を把握することが重要な課題になる。「いじめ」の多義性・多様性こそが「いじり」という事象を把握することの困難さに結びついているのだとすれば、まずは「いじめ」と「いじり」の結びつきを解きほぐさなければならない。

もっとも、私たちはひとつの相互行為場面を考えるときに、「何が『いじり』なのか」という「whatの問い」を立ててしまいがちである。なかには専門家や研究者でさえも、明確な定義をし、それを現場で厳格に適用することでもって、その現場での現象を正確に把握できるとするのかもしれない。たしかに、「いじめ」のように対応が急がれる行為に関して、概念を的確に設定することなくして解決などありえないと考えるのも自然だろう。しかし、このような立場にたつのであれば、あるひとつの想定を受け入れる必要がある。それは、「厳密な定義づけとその運用が、出来事の真実を明らかにできる」という想定である。つまり、「言語レベルでの定義の一致が、ひとつの正しい現実の理解につながる」という見通しを信じ込むことである⁵。

だが、第三者の厳密な定義による客観的把握に分析の優位性があるとはいえない。なぜなら、私たちが目の当たりにする現象は、「ある事柄を真実だと思って日常生活を営む人々によって生み出されたもの」（高橋 2003: 101）なのであって、数値や概念に精通する専門家や研究者によって生み出されたものではないからである。人は常に他者と関わり合いながら生活しており、他者と関与し目の前の状況を理解しあえるからこそ、自分以外の人とも日常的なやりとりができる。そうであるならば、私たちは、日常を生きる人々の視点のもとで、様々なフィールドで生起する現象をいかにしてつくり上げているのかに着眼する必要があるだろう。こうした観点にしたがえば、「いじり」をめぐる問いの立て方は次のように変えるべきである。日常を生きる人々は、どのように「いじり」という状況を認識するのか。すなわち、どのように「いじり」という共通理解の枠組みを成立させているのか

⁵ ここでは北澤（2007）による「いじめ定義」問題への知見を参考にしている。本稿では、概念の厳密な定義や言葉の線引き問題に際して、当事者（ここではドラマの登場人物である女子高校生）のカテゴリー運用に忠実な立場をとる。というのも、研究者といった第三者の定義が分析対象の活動を構成していないからである。もちろんフィクションではあるが、そこでの日常は、専門的な言語的定義ではなく、当事者の言語使用法に依拠して描かれている。こうした見方は「言葉が現実を作り出す」という構築主義的な言語観・現実観に発想を負っている。ここでは詳細に言及しないが、ほかに参考となる「いじめ定義」問題の当否については、山本（1996）や間山（2002）に詳しい。あくまで問題とするのは、「いじられている」と自認する、登場人物の経験の組織化を促すフレーム（＝解釈図式）の如何である。

という「howの問い」を立てるのである⁶。

2. 分析枠組み

(1) E. ゴフマンのフレーム分析

日常生活における人々の相互行為を直接の考察対象として捉えた社会学者のひとりに、E. ゴフマンがいる。彼は、後期の著作『フレーム・アナリシス』において、人々がいかなる状況定義を有するのか、すなわち、ある状況に参加する成員らが目の前で進行する事態をどう認識するのか、またそうした状況定義をどのようにして成り立たせ維持するのかについて、様々な視点からの分析を試みている。そこで、本稿で「いじり」という事象をみるにあたって、相互行為のメカニズムを検討するための手がかりを、『フレーム・アナリシス』のなかに求めてみたい。ここであえてゴフマンによる「フレーム」の概念に着目するのは、その定義が、相互行為において人々の経験がどうあるかという、活動の意味と場面のつながりに焦点化するものであるためである。ゴフマンは、「フレーム」とその諸類型を用いて、経験をめぐる個人と他者の関係のあり方を、共在する場との相互影響関係のなかで捉えた。よって、この枠組みが、相互行為に照準を合わせつつ、それを通して人々が自らの経験および行為を組織化する過程を問うという課題に対して、有用な概念道具を提供してくれるのではないかと考える⁷。相互行為者の経験の組織化とその変容をみていく準備作業として、まずはゴフマンによる「フレーム」概念の基本的な定義を概観し、本研究の分析課題に関わる概念整理から取り組むこととする。

(2) 「フレーム」とはなにか

ゴフマンによれば、「フレーム」とは、「無意味な出来事の流れから、何か意味のあるものへ変化させる働きをもつ」(Goffman 1974: 21) ものであるという。ここで念頭に置かれているのは、「人々が状況的であると定義するならば、その結果として状況は現実的になる」という W.I. トマスが述べた「状況の定義」(Goffman 1974: 1) である。ゴフマンにおいて「状況の定義」とは、個人が現下の状況に参加する際に直面する、「ここで起こっていることは何なのか」という問いに回答する一連のプロセスを指している。ゴフマンは、こうした個人の対象への認知や意味付けを組織化する原理を、G. ベイトソンより運用された「フレーム

⁶ そもそも、「いじり」という言葉自体、明確な研究意図を有した定義が試みられたことはないようである。團 (2013) の論文において、「いじり」に言及するものがみられるが、團自身は、「笑いを含む活動」の一側面として「からかい」を分析しているものの、「いじり」という言葉に焦点化した問題設定をしていない。したがって、本稿でも、蓄積された先行研究に依拠してこの言葉を用いているわけではない。日常で何気なく使われ、振る舞われる「いじり」に対して筆者が疑問を抱くなかで、一度立ち止まって社会的に捉え直してみたかったというのが実状である。よって、「いじり」という言葉の歴史的な変遷や、行為の要件に関する理論的な検討よりも、「いじり」カテゴリーが実際に使用される相互行為場面を確認しておく必要があるというのが本稿の認識である。

⁷ フレーム分析の理論的な再検討をした研究としては、平 (1983)、佐竹 (1993)、木村 (2007) が挙げられる。ゴフマンのフレーム概念とコンテキストの関係を検討した論考としては、串田 (1988) に詳しい。また、会話分析への応用研究として、高橋 (2003) がある。

frame」という用語でもって提示する⁸。したがって、「フレーム」とは、ある状況そのものを指すのではなく、ある状況に参加する人々が、そこでの出来事を意味あるものとして理解するために準拠する基本的な解釈枠組みのことをいう。

(3) 経験の組織化

おそらく、「状況の定義」は、あらゆる社会的場においていつでも見出すことができる。そして、そうした状況定義は、人々の属している社会によってつくられているとはしばしば言われうるとしても、通常、状況のなかにいる人々はこの状況定義をつくりだしているわけではない。一般的に言うならば、人々のしていることは、彼らにとって状況はどうあるべきかを正しく判断し、それに応じて行動することである。

(Goffman 1974: 1-2)

こう述べるように、ゴフマンのパースペクティブの特徴は、状況の定義を内的な個別主観のレベルへ限定された事態では考えなかったことにある。つまり、状況の適切性を個別的主観同士の関係ではなく、「超・主観的存在」(平 1983: 4)としての社会的原理に求めた点にある。そこに「フレーム」という概念を媒介的に個人と現実をつなぐものとして導入した意義があるといえる(平 1983)。では、ゴフマンにおいて、「フレーム」は個人をどのように方向づける役割を果たすのであろうか。本稿の問題設定に即して、大きく2つに分けて整理したい。

第一に、「経験の組織化」である。ゴフマンが「私は社会生活の構造についてではなく、個人が社会生活におけるある瞬間においてもつ経験の構造について主張しようとする」(Goffman 1974: 13)というように、『フレーム・アナリシス』の狙いは、人々の経験を構成する様々な諸要素・諸形式を描き出す点にある。たしかに、日常生活における相互行為の意味は曖昧である。しかし、「フレーム」を運用(=フレーミング)することによって、ある状況に参加する人々は、そこでの出来事を意味あるものとして理解できる。実際、目下の活動の意味は、個人がフレーミングすることによって初めてなんらかの組織だったものとして立ち現れる。例えば、大人が子どもを一堂に集めてなにかを伝達している場面が「教師が生徒に授業を行っているところ」に見えるのは、フレームによってである。このように、「人はフレームに則した知覚を持ち、これらの知覚をもとに行動するのであり、そうしたフレームの運用こそが活動の意味を確立している」(高橋 2003: 103)。つまり、「フレーム」とは、状況定義の作法を規定する諸原理のことであり、「フレーム」の使用によって、個人の活動の意味(=経験)が組織化され、同時にその状況が秩序あるものとして構成さ

⁸ ベイトソンにとってフレームとは、たとえば「これは遊びだ」というメタ・メッセージに沿って特定のメッセージを発信し、解釈するとともにそのメタ・メッセージと矛盾するような特定のメッセージを排除、ないし無視しようとする「心理的特性」のことであり、概念を個人の生得的な能力として位置付けた(Bateson 1972=2000)。木村(2007)によれば、ベイトソンもゴフマンも、フレームを相互に矛盾するような多様な解釈可能性へと開かれている相互行為が孕む豊饒な意味を縮減し、個人の状況定義を迅速かつ的確に「認知」していくための理解の枠組みとして、その動態を捉えるために用いているという意味で、共通の問題意識の上に立っているという。

れるのである。

（４）人格-役割間の構造化

第二に、「人格-役割間の構造化」である。ゴフマンによれば、個人がある活動へ参与するとき、人格としての自己と演技されるものとしての自己は分裂している。すなわち、状況において、参与する主体と、特定の役割ないし能力を実現する主体との間に区別が設けられる。これをゴフマンは「人格-役割図式 person-role formula」（Goffman 1974: 269）と呼んだ。多くの場合、私たちは、役割としての自己を、その背後にある同一体としての個人とともにアイデンティファイしている。つまり、人格としての自己を、個々の役割演技を越えて単一の一貫した個人的アイデンティティや生活史を持つという意味で、状況から超越した独立するものだと考えがちである。しかし、ゴフマンの場合、役割を演技する人格も、対面的相互行為に応じて再編されるという立場が堅持される（平 1983）。あくまでゴフマンにおいて個人とは、静態的な統一体としてではなく、対面的相互行為の推移に即して改変する動的な産物としての人間像を指すのである。

こうした定式化において重要なのは、特定のフレームの性格が、それが維持する人格-役割図式の性格と結合されていることである。というのは、個人と役割の間には完全な自由があるわけでもなく、完全な拘束力があるわけでもない。そのため、状況において個人は、「役割にふさわしい自己とは何かを逐一判断し、外部世界で担う自己と当の活動で演技する自己との間で適当な均衡点を模索する」（Goffman 1974: 269）。すなわち、個人は対面的状況に即しながら、人格-役割間を予定調和的に組織化するのである。このように「フレーム」と「人格-役割」が両連続体の相互依存関係にあることが意味するのは、状況の定義（＝フレーミング）が、分裂した自我図式の制御というドラマトゥルギカルな過程を介して、相互行為それ自体を秩序づける機能を果たすということである（平 1983）。多様なリアリティの定義を担う参与者間において秩序が保たれうるのは、まさに、対面的コミュニケーションの基底に、こうした可変的な自己操作という次元が存在するからに他ならない。ゆえに、「フレーム」の機能は、参与者同士の不確定な「人格-役割」間を制御し構造化することにある。

以上みてきたように、ゴフマンにおける「フレーム」の概念は、認知・解釈的次元のうねに成り立つ環境の構造に焦点化したものであることがわかる。言い換えるならば、それによって主題化されるのは、単に相互行為秩序の類型化であるというよりはむしろ、活動の意味をめぐって相互の関わり方を規制する「共在条件」としてのメカニズムである。

しかしながら、こうした「共在条件」の維持は、居合わせる経験者たちによる個別具体的かつ協同的な参与に依存する。そのため、「状況定義の維持がだれかによって阻害されれば、たちまち不安定になり、揺らいだり、あるいは壊れたりする。明確な言動であれ、表情であれ、それらを的確にキャッチし、当意即妙な『同調』ができないと、相互行為に齟齬感が生じ、また相手から期待に添わない者と見られかねない」（草柳 1991: 107）。つまり、「フレーム」それ自体は決して強固なものではなく、移ろいやすい。ゴフマンが『フレーム・アナリシス』で主題としたのは、まさに、私たちが目の前で進行している事態について「同一」の理解をする際に、準拠する理解の枠組みがこうむっている「脆弱さ vulnerability」（Goffman 1974: 10）であった。相互行為の意味がきわめて脆弱であるとすれば、どのような状況のありようのもとで、そうした「揺れ」が立ち現れるのだろうか。これを検討して

いくために、次節以降では、分析素材としてのテレビドラマを用いながら、引き続きゴフマンの「フレーム」と一連の諸様式の論理構成を追っていく。

3. 分析対象

本稿で「いじり」という事象を考察するために検討素材とするのは、テレビドラマ『35歳の高校生⁹』である。テレビドラマを分析の対象として扱うにあたって¹⁰、あくまで本稿の問題関心に沿った範囲でその概要を簡潔に述べておく。

『35歳の高校生』は、全10話で構成されており、主人公である馬場亜矢子が「いじめ」や「不登校」、「スクールカースト」などの問題と向き合い、それぞれの話で中心人物となる高校生とともに解決していく学園ドラマである。世代が異なる35歳の亜矢子とクラスメートの思惑が交差するなかで、高校生の間関係の脆さが露呈されていく。教師-生徒間の距離感のとりづらさ、生徒間の友人関係の壊れやすさといった点で、ドラマ全編にわたって、現代の学校教育が抱える難しさが描写されているといつてよい。

本稿で着目するのは、第2話「イジメ?いじられ?ピエロの流す涙の訳」である。概要をまとめると、この話の主人公である山下愛は、地味だった中学時代の自分から脱却し、派手な自分へと変わるために美月たちのグループに入るものの、美月たちからは使い走りにされる扱いを受けていた。クラスのグループ内では楽しくなくても無理矢理に笑顔を作らないといけない立場にあり、場の空気を読んで本当の気持ちを隠し、ピエロの様に間抜けた明るいキャラクターを演じていた。また、家庭内では父親から自分の考えを抑圧的に否定される苦痛を与えられており、亜矢子の設置した目安箱に匿名で「たすけて」と書いた紙を入れる。紙を入れた主を探していた亜矢子の問いかけに対して、愛は自身が紙を入れたことを否定していた。だが、階段の転落事故や万引き事件を通じて自身の本心を吐露

⁹ 2013年4月13日から6月22日、毎週土曜日21時から21時54分に日本テレビで放映されていた。平均視聴率は13.3%（株式会社ビデオリサーチ発表〈関東地区〉の数値から算出）。

¹⁰ たしかに、ドラマのセリフは脚本家の作品であり、ドラマ自体はテレビ局のマーケティング的手法でスタッフワークとして作られることが多く、演者自身の意向が前面に押し出されることは稀である。しかし、だからといって、それらは「虚構（フィクション）」として棄却されるべきではない。稲葉（2012）は、フィクショナルな映像データの有用性の方法論的意義を、山村（1971）による「母親のコンセプトズ」に関する研究に見出し、「テレビドラマで表象されている人々の営みは、私たちの潜在的・常識的『文化』を可視的に体現したもの」（稲葉 2012: 140）であるがゆえに、「（ドラマは）ある特定の方法によって再構成された、社会的な『現実』の1つのバージョン」（稲葉 2012: 140）であると述べている。また、北澤（2007）によれば、「ドラマのなかには、いじめ観や学校観などをはじめとした観念や規範など、私たちの社会に流通している文化的要素が埋め込まれている。それゆえ、テレビドラマもまた、私たち読者（視聴者）が読み解くべき社会文化的テキストであり、それは監督や脚本家といったドラマ制作者側の意図やねらいとは別次元で、読者の解釈に対して開かれたテキストとして扱うことができる」という（北澤 2007: 38）。こうした視点は、テレビドラマが広くその社会の大衆の考え方や関心に影響を与え、その時代の世相を投影する文化的装置である点に注目するものであり、本研究でもこうした認識的立場に依拠し、テレビドラマのトランスクリプトを分析素材として扱うこととする。

し、派手な格好と無理に明るく振る舞うことを止め、美月たちのグループからも離れて亜矢子の2人目の友人となるという展開である。

なかでも注目したいのは、この話のなかの時間的に隔たった2つの場面で、登場人物の山下愛が発言した内容である。

「あのね、私はいじられてんの。もっと言っちゃえば、いじられてあげてんの。いじめといじられは違うから。そこんとこちゃんとわかってもらわないと。」

「私、ずっと前からいじめられてた。でも、大丈夫だから。」

ここでのポイントとなる問いは、愛による食い違う2つの発言が、どのようなフレームによって条件づけられていたのかである。すなわち、「愛の経験の再組織化¹¹」を促したフレームとはいかなるものか。愛の「いじられている→いじめられていた」経験の書き換えは、その実践を促す何らかの力が加わる時において実現したと推測できる。たしかに、個人の性格的気質や体質にその原因を還元する説明も可能であろう。あるいは、その登場人物が頑なに自認しているだけであって、彼女を取り巻く友人グループの陰湿な戦略として、もともと「いじり」なのではなく、潜在的な「いじめ」であったと裁定することも可能であろう。

しかし問うべきは、何がその出来事の原因なのかでもなければ、どのようにその出来事を捉えられうるのかでもなく、むしろ当事者がどのようにして自らの経験にカテゴリーを適用しているのかどうかである。愛が泣きながら「いじめられていた」と発話する結果に行き着くまでには、様々な人間関係の描写があった。つまり、周囲の仲間との相互行為的なやりとりが、彼女自身の経験の再組織化を促し、人格と役割に対する意味づけまでも変化させたとみることも十分可能である。こうした社会的な要素を踏まえると、「いじられている」として経験を了解する愛を取り巻く社会的関係と、その変容を問う意義が生まれる。そのために必要な作業は、愛とその周囲の人々の相互行為の具体相を明らかにし、そこに

¹¹ 本稿では、愛による「いじられている」「いじめられていた」といった発話を、「経験の（自己）記述」と措定したうえで議論を進める。分析データを記述的に再構成するにあたって、ここでは発話行為と経験の内実との整合性についての判断を留保する。「経験の実態」と「経験の記述可能性」は分離されるべきであるというのが本稿の立場である。こうした「〇〇の『存在』と〇〇の『言語的表現』」の問題については、清矢（1994）に示唆を得た。なお、本稿で「経験」として念頭に置いているのは、基本的にゴフマンがいう「経験（＝活動の意味）」概念であるが、「経験を捉えるとはどういうことか」について補足しておく必要がある。社会学におけるナラティブ・アプローチについて考察した菊池・大谷（2003）によれば、「個人の視点からの不断の時間的流れであるため」分析対象とできないものを「体験」、「観察者が聞き取れる」「事後的に語られる」ものを「経験」と定義する（菊池・大谷 2003: 170）。また、北山（1998）は、野家（1996）の物語論を踏まえ、「経験を捉えるとは、経験を徴すふるまい、すなわち経験をかたどる語り（の痕跡）を捉えることであるとともに、経験をほかならぬそのような経験として顕現させる物語装置のありように想像をめぐらせることである」と述べている（北山 1998: 120）。愛の発話そのものがあるままの経験の描写ではなく、『『解釈学的変形』の操作』（野家 1996: 107）であることを踏まえ、本稿では愛による事後（遡及）的なフレームの運用を考察対象に含むことから、ゴフマンの「経験」概念を拡大解釈したうえでこの言葉を用いることとする。

見られるフレームの抽出によって、愛の「いじられている→いじめられていた」経験の再組織化過程を把握することである。すなわち、フレーム分析的観点に基づく相互行為の観察と記述¹²を主要な研究方法とする。次節では、テレビドラマの登場人物らが相互行為のなかでどのようにフレーミングしているのか、実際にその場面を観察し記述していく。

4. 考察 —フレームの複層性と脆弱性

(1) フレームの「安定」

前節で取り上げた愛の一つ目の発言にみられるように、なぜ愛はこの話の終盤まで「私はいじられている」と（遡及的に）状況を定義しつづけたのか。それは、美月らと共在する場において、「愛いじり」というフレームが途中まではなんとか安定した形で遂行されていたからにはほかならない。まずは、次の場面を見てもらいたい。

○場面1（第2話：ある日の放課後、学校帰りで山下愛と美月らが会話をしている）

01 美月 : あーそうだ。今日さ、みんなでカラオケ行かない？

02 ABC : いいねー。

03 愛 : あ、あたし... お金ないんだよね。

04 美月 : きてよ。愛。

05 A : そうだよー。愛抜きだと盛り上がんないんだから。ねえ。

06 B : お金なんてウチらもないよ。ねえ。

07 愛 : けど...

(Aが「あーい(愛)」とはやし立て始める)

08 美月 s : あーい！あーい！あーい！あーい！

09 愛 : だーよーねー。ここでのらなきやあたしじゃない？

10 AB : さすが。やっぱ愛がいなきやねー。

11 美月 C : (不敵に微笑みあう)

これは、愛と美月らがある日の放課後に交わしたやりとりである。お金がなくてカラオケに行くことを渋っている愛に対して、美月らが愛をカラオケに来るよう説得する様子を確認できる。具体的には、3行目で愛が「お金をもっていない」という発話によって、カラオケに行くことをためらう意思表示をみせたのにもかかわらず、ABC（愛と美月の同級

¹² なお、佐竹（1993）が述べるように、エスノメソドロジック的視点（会話のような観察可能なものに対象を限定する）をとることで、フレームそれ自体の記述/分析は可能であると考えている。というのは、現実の相互行為空間でわれわれが実際に観察しうるのは「ムーブ」（相互行為のミニマムな単位）の連鎖のみだからであり、「ムーブ」の連鎖における「転調」や「偽装」も、一時一時の変移として、その都度発見されるものだからである（佐竹 1993）。ゴフマンはフレームの全般的な記述をとおして、成員の状況への参与の形式を現実から抽象されたレベルで描き出したが、実証研究として他者に開かれた検証可能性を担保するためには、「記述可能なその社会的な諸配置の側」（佐竹 1993: 29）からアプローチしていく必要がある。その意味で、本研究はフレーム分析の実証的な応用研究としても位置付けられる。

生)は好意的な振る舞いでもって愛にしつこく迫っている。しまいには愛を囲むようなかたちで名前を連呼するはやしたてを行い、それに対して愛は満面の笑顔で「私らしい自分」を見せる。一度は誘いを拒もうとしたのに、最後には明るく同調してしまう様子からは、美月らの「期待」に応えたいという愛の強い願望がうかがえる。

この場面において、なぜ愛と美月らは秩序立った相互行為空間を維持できたのか。美月らは「お金がないんだよね」と誘いを断ろうとした愛を非難したり責め立てたりせず、むしろ笑いながら愛を承認する素振りをみせた。それに対して、愛も美月らに嫌がる態度を見せることなく美月らが口々にする名前の呼びかけに応じた。換言するならば、どうして一瞬の意見の不一致が垣間見えたにもかかわらず、愛と美月らの対面的相互行為が安定的に収束したのか。それは、成員の思惑のずれを修正し事態を一定の方向へ収束させるように働きかけるフレームが共有されていたからであり、愛と美月らのあいだに「相互行為の意味を最終的に確定させるような認識が終着するなにか」が存立条件としてあったからである。ゴフマンの言葉を借りるならば、場面1は「ここで起こっていることが何なのか」についての「調性 keys¹³」が相互に獲得された状態にあったからである。

もちろん、「本当に」美月らが愛をいじっていたかどうかは定かではないし、「本当に」愛が美月らにいじられていたかどうかはわからない。だがここで問題となるのは、行為の真偽そのものではなく、成員が「愛いじり」という安定した特定のフレームのなかに居るという状況である。「愛いじり」というフレームのなかに居るということは、8行目の美月らによる愛の名前を連呼する行為と、愛による「ここでのらなきやあたしじゃない？」と明るくおどけてみせる様子からも読み取れる。ここには、愛も美月らもフレームを「適切に」理解したうえで活動の意味を組織化し、対面的相互行為を展開していることが見て取れるだろう。つまり、特定のフレームに注意を払い主要な関与を向けるからこそ、場面1において愛と美月らに対立関係に転じることなく「群れる」関係を保つことができるのである。したがって、場面1で描かれている行為とは、たとえ本当は細やかな感覚や意見の違いがあったとしても、それが問題化されないままに、とりあえず「愛いじり」を達成するという焦点が互いに定まった相互作用であるといえる¹⁴。

しかしながら、この場面で見逃してはならないのは、会話の最後に美月とCが微笑みあう非言語的なやりとりである。これはいったい何を意味する素振りなのだろうか。場面1のやりとりが単に「愛いじり」という調性が獲得されたフレームワークの結果であると考えれば、われわれは美月とCが微笑みあう行為の意味を理解するのは困難であろう。つまり、「ここで進行していることはいったい何なのか」をわれわれが観察することを試みる際には、成員間が調性を安定的に獲得する活動だけでなく、それ以外の活動にも注目する必要がある。

¹³ 「調性 keys」とは、「何らかの基礎的な枠組み（フレームワーク）によって既に有意味になっている活動が、この活動パターンになぞらえながらも、その参加者によってまったく別のものとみなされるものとして変換された一連の慣習の束」（Goffman 1974: 43-44）のことである。例えば場面1の場合、2行目までが「愛と美月らの登下校」というフレームワーク（＝調性を獲得する前の活動：基礎的なフレームワーク）であり、4行目以降が「愛いじり」というフレームワーク（＝調性を獲得した後の活動）であるといえる。

¹⁴ これ以外にも場面1と同様に、カラオケルーム内で「愛いじり」というフレームワークが相互行為的に達成される描写がある。

その鍵となるのが、「偽装 fabrication」である。ゴフマンによれば「偽装」とは、「個人、あるいは複数の人間が、他の個人、ないし複数の人間に、ここで進行していることについて誤った信念を抱かせるように、1人以上の個人が意図的な努力によって活動を操作する過程」(Goffman 1974: 83)である。「偽装」は「悪意のない偽装 benign fabrication」「搾取的偽装 exploitive fabrication」の2つに大別される。「悪意のない偽装」とは、情報隠蔽の対象となる人のためになされるよう計画されたり、少なくともその人の利益に反することがないようにデザインされたりするものをいう。それに対して、「搾取的偽装」とは、あるグループが他者に対して情報を隠蔽することによって、それらの他者にとって有害であることが明らかであるような罠を仕掛ける類の偽装である。テレビドラマの観察次元からでは、行為者の意図を把握し利害に対する意識を確かめることが困難であるため、愛と美月らのケースがいずれの「偽装」の分類に該当するかの確に指摘することは難しい。よって、さしあたりここでは、「偽装」の共通特性に注目するかたちで議論をすすめたい。「偽装」フレームの諸類型に共通する特徴は、状況の参加者がここで進行していることについて異なる認識をもっているという前提である。そのため、2人以上が騙す側である場合には、隠れたコミュニケーションが必要とされ、騙される側はそうした「共謀」から排除されることを意味する。

ゴフマンの「偽装」の理解にしたがえば、場面1における美月とCによる不敵な微笑みは、こうした「偽装」フレームに深いかかわりがあるように思われる。つまり、愛と美月らには状況定義の断絶があり、「愛いじり」というフレームには、「偽装」という別の理解の枠組みが付与されていたのではないだろうか。

この仮説を実証するデータを検討するために、場面2をとりあげてみたい。

○場面2 (第2話: 愛がいないときの会話 ※D・E・Fは同じクラスの男子高校生)

- 01B : いやーあぶなかったよねー。自殺されてさあ、もし遺書に名前があったら、ウチらいじめっ子になっちゃうよ。
- 02A : シャレになんないよね。それは。
- 03D : てか悪魔だよな。今日もカラオケのお金、払わせたんだろ？
- 04A : ちがうよ。愛が自分で言ったんだから。金だすって。
- 05B : で、いったん家戻って、親の金ばくってきたわけ。
- 06E : 空気読んでんだよな。アタシが払わなきゃまずいって。
- 07 美月 : なんで？だってウチら、仲良しグループなのに。ねえ？
- 08ABC : ねー。
- 09E : やりすぎんじゃねえぞ。
- 10F : そうだよー。俺らはさあ、ただ高校生活を楽しまたいだけなんだぜ？
- 11 美月 : 言ってる意味わかんないですけど。
- 12 一同 : (全員が笑う)

これは第2話中盤で、美月らが転落事故の知らせを聞いて愛のもとへ駆けつけ、病院から帰る途中で交わしたやりとりである。Bの「あぶなかったよね」という発言からは、愛の転落が「自殺」行為ではないことがわかり、安心している様子が読み取れる。だからといって「いじめ」に対する認識をもっていそうかといえ、決してそうではない。というの

も、Aの「シャレになんないよね」という言葉からは、自分たちが「いじめっ子」を引き受けたくないという願望をうかがえるからだ。ここには美月らによる「いじめ」カテゴリへの距離の取り方が示されている。さらに注目したいのは、美月による「仲良しグループなのに」という発話である。こう屈託なく述べる姿からは、愛を傷つける対象ではなく、あくまでも行動を共にする仲間として同定していることがわかる。愛を仲間の一人だと述べることで、自分たちの行いを正当化する連帯意識を確認し合っているようにみえる。それゆえ、普段「愛をいじる」ことに対して悪びれる様子を感じられない。

こうした美月らの「共謀的 collusive コミュニケーション」(Goffman 1974: 83-84) から指摘できるのは、場面1と場面2のフレームの非対称性である。美月らは、愛と対面するときのフレームと、愛がないときのフレームを使い分けている。より正確に言えば、場面1の「愛いじり」というフレームは、美月らによる「偽装」という別のフレームによってラベル付けされている。すなわち、ゴフマンが、「フレームが複数の再転調を組み込む可能性があれば、その変換の一つひとつを活動に対して層 layer ないし積層 lamination を付け加えるものとする」と述べるように、愛と美月らが共在するフレームには「複層性」が存在する。もちろん、そうした二重のフレームは、美月ら単独で達成され維持されるものではない。むしろ、美月らを欺く者足らしめるのは、欺かれる者である愛の存在である。すなわち、行為者間で経験をめぐり情報の不均衡を伴って初めて、「偽装」フレームは効果的な働きをする。ゆえに、美月らが「愛をいじる」こととは、単に「偽装」フレームの解釈実践の帰結であるだけでなく、経験をめぐり情報の偏在のうちに展開された相互行為なのである。

それでも、愛にとってみれば、実際は「偽装」であることを知らないわけであるから、美月らとともにいる状況定義は変わらない。それを象徴するのが次の発言である。

愛：あたしってこういうキャラなんだよね。こうしてるほうが楽なんだよね。何ていうか...ほら、ピエロみたいな？周りをハッピーにできるなんて最高じゃん。みんなからそういうの期待されてるし...さ？

馬場亜矢子が「いいんじゃない？（こんなときには）笑わなくても」と問いかけたのに対して、愛は「キャラなんだよね」「こうしてるほうが楽なんだよね」と語っている。このように、第2話の中盤まで愛は「いじられている」経験を追認している。2節で整理したように、ここには愛に対して活動の意味を組織化するだけでなく、状況において相応しい自己を要請するフレームの効力があらわれているといえる。

（2）フレームの揺らぎ

だが、私たちは常にそつなくフレーム操作を行えるわけではない。むしろ、日常的に失策行為を生み出している（栗原 1988）。すなわち、私たちは日常において、フレームの脆さ、傷つきやすさに直面し、フレームの修復を試みたり、自分の行為や自己をフレームに適応させたりする。実際、第2話後半部分の場面3では愛と美月らの相互行為空間の性質に変化が見られるようになる。

○場面3(第2話：置き引き失敗後の愛と美月らの会話)

- 01 愛 : なんなの。あのおばさん。まじ迷惑なんだけど。
 02 美月 : あんたさあ。自分の立場わかってんの？
 03B : あんたがとろいから失敗したんだかんね。
 04 愛 : やっぱりそうなっちゃう感じかな。ははは。
 05C : へらへら笑ってんなよ。まじむかつく。
 06A : 悪いと思ってるんだったら、誠意、みせてよ。
 07 美月 s : (店に置いてあるかばんの方を見る)
 08 美月 : あ、別にウチら欲しいなんて言ってないから。
 09A : そ。なんにも期待してないよ。あんたなんかに。
 10 愛 : (立ち止まり、笑顔が消える)

それまで愛と美月らが対面する場では、「愛いじり」という均衡が保たれていた場面であったが、愛が亜矢子に責任転嫁しようとする、美月らはこぞって愛を責めたてる発話に転じるため、緊張が際立つ場面となっている。愛は「やっぱりそうなっちゃう感じかな。ははは」と美月らに対しておどけて見せることで、いつもの予定調和な自己を提示しようと試みるが、Cの「笑ってんなよ。まじむかつく」という応答にみられるように、それが逆効果となっている。さらに、美月らは愛に置き引き失敗の代償を払わずために、今度は万引きをするよう暗に促している。Aの「なんにも期待してないよ。あんたなんかに」というセリフからは、場面1における愛への期待や、場面2でみられた仲間意識を感じ取ることは困難である。

つまり、場面3では、「愛いじり」というフレームは相互行為的に達成されておらず、むしろ愛と美月らの状況定義のずれが露見している。言い換えるならば、美月らの「偽装」フレームの「外縁 rim¹⁵」が崩れ始め、複層的であったはずのフレームの境界が揺らいでいる。実際、場面の終結部で、美月らの叱責を受けた愛は笑みを浮かべるのを止め、暗い表情にシフトする。この様子から、愛の「いじられている」という経験は再組織化され始め、自分と異なるフレームにいる美月らとの狭間でせめぎあっていることが見受けられる。一方で、美月らにとってみても、直接、愛を非難する行為を遂行することによって、それまでの「共謀」は失策し、「偽装」フレームを維持し損ねている。フレームの「脆弱性」とはこのことである。したがって、場面3は、愛にとっても美月らにとっても、フレームが交差する結節点への移行段階にあると観察される。

(3) フレーム破り

先で考察した通り、「愛いじり」というフレームには、「偽装」という別の変換フレームが付与されていた。それらの境界は、デザインの熟知者(美月ら)とデザインに押し込められた無知者(愛)という情報の非対称性によって堅持されていた。ところが、そうした

¹⁵ ゴフマンによれば、「偽装」のようなフレームの変換に対する、ある種の制御を可能にする用語として、「外縁 rim」という概念を提示している。これは、「フレームが複数に成層化する場合でも、全体の活動が現実世界においていかなる地位を占めているかを示すことができるもの」(Goffman 1974: 81-82)である。愛と美月らの事例に当てはめてみると、「愛いじり」というフレームを取り巻く、美月らの「偽装」フレームの稼働を保証する時間・空間的範囲が「外縁」であるといえる。

フレームの「安定」は束の間のことで、美月らの愛に対する否定的な切り出しを契機として、相互行為空間に変調がもたらされた。フレームの揺らぎを目の前に、場面3の終結部のように、愛はひとり暗い表情で立ちすくむのである。美月らを仲間だと思っていた愛にとって、フレーム認知のずれとは、美月らとの信頼を脅かす重大な問題である。それでも、学校の教室内で完結するような狭い人間関係のなかでは、即座に美月らと袂を分かつことは困難である。

愛が置かれたジレンマ状況のように、いったんフレーミングに支障をきたす場合、当意即妙に別のフレームに同調ないし適応したり、そこから離脱したりすることは決して容易でない。にもかかわらず、愛が「いじられている」という経験を再組織化できたのはどのようにしてか。最後に、場面4を検討してみたい。

○場面4（第2話：愛がクラス全員に謝罪する場面）

01 亜矢子 : (愛の万引きした瞬間のビデオ録画をみせる)

見てよ。ここ。おっちょこちょいだよね。わざわざ店員のこんな目の前で万引きするなんて。これだとまるで、捕まりたいから万引きしたように見えるけど。まさか...違うよね？辛いことがあって、もうそれ終わりにできるかも...なんて考えるわけないしね。山下さん、人気者だもんね。笑いあって、盛り上げて、そうやってやって行きたいんでしょ？ピエロだっけ？自分でそう言ってたじゃない。あれホント、ぴったり。これからもずっと、そうやっていきたいもんね。ずーっと。そうだよ？山下さん。

02 愛 : (泣きだす)

これは、第2話終盤で馬場亜矢子が愛に語りかける場面である。この場面の経緯として、万引きで学校から停学処分を受けた愛とその父親が、教室でクラスメート全員に謝罪しようとする矢先に、亜矢子が割り入って2人と相互交渉するという展開がある。愛は、亜矢子から目安箱に「たすけて」と書いた紙を入れた人間をきかれ、最初は美月らの視線を気にしつつ気丈に振る舞っていた。だが、亜矢子の言うて聞かせるような発話をきっかけに、愛は泣きだし、最終的には皆の前で「いじめられていた」と口火を切るのである。

なぜ亜矢子の語りかけは、愛に「泣き」という感情的発露を伴った経験の再組織化を促したのか。それは、亜矢子の発話が、その迫り方とは別次元で、愛の（遡及的な）フレーミングを変容させる「フレーム破り **breaking frame**」をもたらしたからである。「フレーム破り」とは、フレームが思いがけず失われたり、働いたり、変化したりする現象を意味する。ゴフマンによれば、「個人がある状況の定義へ参与しているときに、活動自体は進行しているにもかかわらず、突然、周囲の状況が個人にフレームが課している関与 **involvement** を解くことがある。このような離脱 **disengagement** が、フレーム破りを引き起こす」(Goffman 1974: 349) という。

愛のフレーム関与を解かせる周囲の状況とは、「偽装」フレームを謀った美月らが居るなかで、亜矢子が愛に対し「違うよね」「考えるわけないしね」「そうやっていきたいもんね」と何度も言い聞かせる状況である。場面3で美月らの「本当の気持ち」に気づいた愛にとって、亜矢子がこのように愛を「人気者」「ピエロ」だと同定することは、愛に再び「偽装」

フレームへと押しやることを意味する。換言するならば、亜矢子の語りかけは、愛の迷いやためらう気持ちを逆撫でする強迫である。

だが、そうした亜矢子の「非情」な論しだからこそ、ぎりぎりのジレンマ状況に追い詰められた愛の緊張は限界点に達し、フレームへの自発的な関与を維持する感情的負荷が外れるかたちで、フレームの離脱と転換（経験の再組織化）が促されたと考えられる。すなわち、愛は「フレーミングのランダムネス」（平 1983: 7）という状況に置かれたなかで、「～よね」「～でしょ？」と意図的にフレームの定式化を繰り返す作用を働きかける亜矢子によって、愛のなかでせめぎあっていた新たなフレームがより優先され大きな力を持った結果、「フレームの溢れ出し flooding out¹⁶」現象が起きたといえる。新たなフレームが力をもつとはいっても、外側から一方的に規制するような条件ではない。愛の「いじめられていた」経験への書き換えは、フレームの諸機能のひとつである「人格-役割図式」の再編に結びつくかたちで、愛と亜矢子の相互交渉において実現された結果である。

したがって、個人の経験が再組織化することとは、予め現存するフレームによって規定されるのではなく、むしろ場面1から4で観察された「安定したフレームの達成、共謀的コミュニケーション、フレームの揺らぎ、フレーム破り」などの個別の環境の構造のもとで、参加者が自他を記述し合う過程に起こりうることなのである。すなわち、愛の「いじられている→いじめられていた」経験への再組織化とは、錯綜するフレームと結びつくかたちで展開された、相互行為者による記述実践の帰結である。

むすびにかえて ―フレーム分析の効果と課題

本稿では、「いじり」という事象をエスノメソドロジーの立場から問い直すというねらいのもと、テレビドラマの事例を用いて、人々が実際にどのような状況のもとで「いじり」という経験として引き受け、ひいては離脱しうるのかを、その機序とともに明らかにした。

第1節では、分析課題に関わる先行研究を整理し、本稿の独自の切り口で現代の『『いじり』をどうみるか』について問う意味を述べた。第2節では、分析の焦点を明確にするために、フレーム分析的観点に基づく相互行為の観察と記述が主要な研究方法であることを確認した。その背景として、「第三者の厳密な定義による客観的把握の優位性」への疑問を挙げ、「行為者を取り巻く相互行為の観点から対象に接近する有意性」を指摘した。さらに、ゴフマンの「フレーム」概念の意義について再考し、本研究の分析課題に関連する概念整理を行った。第3節では、本研究における分析対象の概要を述べた。具体的には、テレビドラマの登場人物の2つの発言とその経緯を中心に、経験が再組織化されていく過程を明らかにすることが分析課題であることを確認した。第4節では、「フレーム」の定義とその社会的機能をふまえ、社会的相互行為の観点から有意な場面を4つ取り上げた。「安定」した「いじり」フレームを出発点に、「偽装」フレームの発見とその結節点への移行を経て、最終的には「フレーム破り breaking frame」と「溢れ出し flooding out」に達するまでの過程の分析を試み、そのなかで「フレームの複層性と脆弱性」を可視化させた。結果として、

¹⁶ 「溢れ出し flooding out」とは、「活動の参加者における突然の感情表出（笑い出す、泣き出す、怒り出すなど）によって、少なくとも一時的に、そこでの多くの組織化された役割を引き受けることができなくなる状況」（Goffman 1974: 350）を意味する。

①フレームの段階的移行に伴う愛の語りの変容、②愛の人格-役割間における摩擦と他者との折り合い、③「偽装」フレームの脆弱性を暴露する文化的エージェントの存在の3点を明らかにした。

ただ、本稿は相互行為の場に重点を置いた関係で、相互行為の背後にある広がりや、異なる意味合いへの考察が不十分であった。本来、相互行為は行為者の属性のみならず、社会構造や非言語的な情報媒体との連関のなかで捉えられなければならない、相互行為の質的内容研究や構造分析のような社会学的方法論をきちんと取り込んだ分析が必要であった。個人と集団と社会の三者関係をより奥行きのある考察につなげていくためにも、今後は相互行為の場以外にも目を向けて、より広い文脈で分析対象に接近していきたい。

しかし、本稿で目指していたのは、相互行為の理論的な探究でもなければ、メディア分析に関する研究でもなく、「いじり」という事象を読み解くうえで有効なひとつの方法獲得であった。そのために、テレビドラマで営まれる何気ない場面に注目し、社会的な視角（フレーム）を取り入れるかたちで、登場人物の相互行為とその展開過程を読み解いてきた。本稿で試みたように、「いじり」に関する研究は、「相互行為における手続き上の特徴」（高橋 2004: 78）を探究するなかで、新たな境地を開くことができると考えられる。なぜなら、現実世界で私たちが何気なく行う「いじり」も多様だからである。誰もが愛のように、「いじられている」経験を再組織化するわけではない。相互行為に何の齟齬も情報の偏在もない場合、それはフレームのコンセンサスを得た「愛情表現の『いじり』』」といえるかもしれない。あるいは、経験の再組織化の途中段階ならば、参加者はフレーミングのがんじがらめ状態に置かれ、疑問符付きの「いじり」を実践し続けるか、亜矢子のようなエージェントの登場を待つことになるだろう。逆に、愛とは全く逆のフレーム移行が成立する場合であれば、逆の再組織化（いじめられている→いじられていた）も起こりうる。つまり、「いじり」という行為は、一義的に捉えられるのでもなく、万人にとって観察可能なかたちで存在しているわけでもないのである。相互行為を生き生きと描き出しつつ、その基底にある社会的なメカニズムを把握するためには、対象を「いじり」とみるかそれ以外のなにか（「いじめ」など）とみるかに拘泥するのではなく、むしろ、実際に相互行為を実践する参加者が「いじり」というカテゴリーを引き受けたり、なにかに付与したりする過程にこそ注目すべきなのである。

こうしたパースペクティブが一定の範囲で有効であるとすれば、本稿で行ったような分析を「いじり」だけにとどまらず、例えばハラスメントや差別のような事象にも応用可能であるかもしれない。なぜならば、愛の事例が示したように、「経験の硬直化」とは、フレームの編成と大きく結び付くからである。重要なことは、特別な人同士が特別なフレームのもとで行うという事実ではなく、誰もがいきなりふれた活動のもとで、人々の経験が成員間のフレームの脆弱さにさらされているという点である。様々な「安定」してみえる活動の自明性を批判的に捉え直すにあたって、このような考え方を別の考察対象へ反映させていくことは一つの方法であろう。本研究の新しい応用可能性に期待しつつも、更なる相互行為の実証的な探究を今後の課題としたい。

引用・参考文献

Bateson, G., 1972, *Steps to an Ecology of Mind*, The University of Chicago Press. (=2000, 佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社.)

- 團康晃, 2013 「指導と結びつきうる『からかい』: 『いじり』の相互行為分析」『ソシオロジ』 58(2): 3-19.
- 土井隆義, 2009=2011 「フラット化するコミュニケーション: いじめ問題の考現学」長谷正人・奥村隆編『コミュニケーションの社会学』有斐閣: 271-289.
- Goffman, E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harvard Univ. Press.
- Gubrium, J. F. and Holstein, J. A., 1990, *What is Family?*, New York: Mayfield Publishing Company. (=1997, 中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳『家族とは何か: その言説と真実』新曜社.)
- 本間友巳, 2009 「<いじられキャラ>となっている子をどう考え、どう支援するか」『児童心理』 63(5): 98-102.
- 稲葉浩一, 2012 「『涙の共同体』としての『3年B組金八先生』: 卒業式における『集合的な泣き』の分析」北澤毅編『文化としての涙: 感情経験の社会学的探究』勁草書房: 134-157.
- 岩内亮一・本吉修二・明石陽一編, 2006 『教育学用語辞典第四版』学文社.
- 菊池裕生・大谷栄一, 2003 「社会学におけるナラティブ・アプローチの可能性: 構築される『私』と『私たち』の分析のために」『年報社会科学基礎論研究』 2:167-183.
- 木村雅史, 2007 「E.ゴフマンの相互行為分析の展開: 『フレーム分析』における『括弧入れ』概念の意義」『社会学研究』 81: 23-46.
- 北澤毅, 2007 「『いじめ自殺』の構造: テレビドラマ『わたしたちの教科書』の分析を通して」『立教大学教育学科研究年報』 51: 35-51.
- 北山由美, 1998 「<登校拒否>経験の物語性について」『立教大学教育学科研究年報』 42, 119-132.
- 木堂椎, 2006 『りはめより 100 倍恐ろしい』角川書店.
- 栗原孝, 1988 「『みえないフレーム』の分析フレーム: E.ゴッフマンと歪められたコミュニケーション」『亜細亜大学経済学部紀要』 13(2): 61-94.
- 草柳千早, 1991 「リアリティ経験と自己-他者関係: ゴフマン-レインの『経験の政治学』への視角」『関東学院大学文学部紀要』 64: 103-120.
- 串田秀也, 1988 「『フレーム』と『関与』: 相互作用分析における『コンテキスト』の問題へのゴフマンの視角」『ソシオロジ』 33(2): 3-20.
- 間山広朗, 2002 「概念分析としての言説分析: 『いじめ自殺』の<根絶=解消>へ向けて」『教育社会学研究』 70: 145-163.
- 森真一, 2009=2011 「暴力と悪というコミュニケーション」長谷正人・奥村隆編『コミュニケーションの社会学』有斐閣:291-309.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編, 1972=2000 『日本国語辞典第二版第一巻』小学館.
- 野家啓一, 1996 『物語の哲学』岩波書店.
- Sacks, H., 1963, "Sociological description", Coulter, J. ed., 1990, *Ethnomethodological Sociology*: 85-95. (Reprinted from *Berkeley Journal of sociology* 8: 1-16.)
- , 1972, "On the analyzability of stories by children", Coulter, J. ed., 1990, *Ethnomethodological Sociology*: 254-270. (Reprinted from *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. By Gumperz, J.J and Humes, D, eds., New York, NY:

Holt, Reinhart and Wilson: 329-345.)

- 佐竹保宏, 1993 「相互行為秩序の分析可能性：『フレーム』と『エスノ・メソッド』」『現代社会理論研究』3: 13-35.
- 清矢良崇, 1994 『人間形成のエスノメソドロロジー：社会化過程の理論と実証』東洋館出版社.
- 平英美, 1983 「E.ゴフマンの“frame”概念について」『大阪教育大学紀要・第Ⅱ部門・社会科学・生活科学』32(1): 1-12.
- 高橋靖幸, 2003 「授業『中断』のフレーム分析：人びとの経験と授業秩序の組織化」『立教大学教育学科研究年報』46: 101-108.
- , 2004 「子どもの〈泣き〉を基盤とした相互交渉の展開：『子ども』という相互行為者の解釈実践に着目して」『立教大学教育学科研究年報』48: 69-78.
- 山本雄二, 1996 「言説的实践とアーティキュレーション：いじめ言説の編成を例に」『教育社会学研究』59: 69-88.
- 山村賢明, 1971 『日本人と母』東洋館出版社.